

テレビニュース番組における形式的娯楽化の現状と

その問題：字幕・テロップを中心として⁽¹⁾

Well-guided or misled? : Open Captions and the Tabloidization of the TV News Programs in Japan

川端 美樹
(Kawabata Miki)

Abstract :

The purpose of this study is to discuss the recent diversification of and sophistication in the visual presentation on TV programs in Japan, especially about the frequent uses of open captions in tabloidized TV news and infotainment programs. Since the 1980s, News programs in Japan have been popularized and become more entertainment-oriented. With this tendency, not only news content has become "softer", but also the means of audio and visual representation has become more diversified and sophisticated. For example, they use increasingly more graphic effects and open captions, in order to attract a larger audience and make the content more comprehensible. In consequence, do they guide the audience better or do they mislead them, in terms of their understandings of the information or their perception of their society and themselves? In this study, the author tries to examine these schemes of visual representation with a preliminary content analysis of the News programs and discusses their cultural and socio-psychological meaning.

キーワード：テレビニュース、娯楽化、テロップ

Key Word : TV News, Tabloidization, Open Captions

1 はじめに

最近、テレビニュースの娯楽化が進行していると言われていいる。ニュース番組と情報番組、ワイドショーなど、かつてジャンルとしては区別されていた番組間の境界線があいまいになってきたことに加え、ニュース番組ではその内容や構成に様々な工夫が凝らされ、効果音や小道具、あるいはテロップを多用した演出が多く見受けられるようになった。このような傾向は、一般的に制作者側が視聴者を「おもしろさ」、「楽しさ」、すなわち娯楽で引きつけ、視聴率を

上げるための目的で促進されていると考えられる。また、このような工夫は、本来視聴者が敬遠しがちな理解が難しい問題を扱うようなニュースに人々を引きつけ、必要な情報に接する機会を与えることや、よりよく理解させる助けになることもあるだろう。しかし、本来娯楽番組とは一線を画してきた報道番組が娯楽化することは、さまざまな問題をも生み出すと考えられる。

本研究では以上のように、テレビニュース番組がさまざまな形で娯楽化する中、特にその形

式的娯楽化、すなわち演出による娯楽化に注目し、特にその演出多用化の中でも、ニュース番組におけるテロップや字幕などの文字情報を中心に、その影響、視聴者の評価などについて議論していく。また、最後に、その現状に関する予備的な内容分析を試みる。

2 日本におけるテレビニュース番組の娯楽化傾向の現状

近年、新聞、テレビなど報道の分野において、テレビのニュースやドキュメンタリー番組など、本来は娯楽的な機能を持っていなかったジャンルにおける娯楽化傾向が、主に先進工業諸国において世界的に問題になってきた。特に1980年代以降、様々な情報技術の発展とともに、新聞記事や放送番組のビジュアル化および娯楽化が進行し、それと同時に報道の真面目な部分であるテキストやナレーションの短縮や軽視などの現象も生じた。このような現象は「タブロイド化」あるいは「インフォテインメント（「情報」と「娯楽」を合わせた造語）」化といった言葉で呼ばれている（林、1999）。

日本では1980年代より、特に民放のニュース番組において、その放送時間枠の拡大に伴い、ニュースの内容が変化し、また視聴者の興味を引くようなさまざまな演出上の工夫が凝らされるようになってきた。例えば1988年にNHKと民放5局の夕方のテレビニュースの内容分析を行った上滝（1989）によると、1970年代と1980年代を比較すると、1980年代の方がニュースのソフト化（ソフトニュースの割合が大きくなること）が目立つようになったという。また、1990年にNHKと民放2局の夕方と夜のニュース番組を内容分析した萩原（1992）は、1990年代にはさらにニュース番組のソフト化が進展し、また夜よりも夕方の番組でソフトニュースの比重が大きいという結果を得た。

さらに最近のテレビニュース番組の娯楽化傾向については、萩原（2001）が、東京の民放5局とNHKおよびNHK-BS1の夕方および夜のニュース番組の内容分析を1997年に行っている。その結果、90年代には、前述のソフトニュースの増大というような内容面での変化よりも、テ

ロップや字幕、フリップ、BGMや効果音、あるいはCGなどの視覚的装置や他の手段によるショーアップの傾向、すなわち番組演出の過剰化とも言える形式面での変化が大きかったことがわかった。

特に、内容面での娯楽化傾向としては、1980年代と比べて大きな変化はなかったものの、ソフトニュースの割合が全体に高い割合を占め、夕方のニュース番組は、開始時刻を繰り上げて時間枠をのぼしている傾向があった。しかし、その場合は新たにニュースの内容が増えたり、掘り下げた解説が行われるのではなく、同じニュースの繰り返しや、ニュース性に乏しい内容の挿入が多かった。さらに1990年代のニュース番組の娯楽化傾向の特徴は、その形式面に現れていた。BGMなどの音響効果の利用が大幅に増えているほか、従来とは異なる使い方をされる字幕やテロップの使用などの演出が多用され、視聴者の注意を引く様々な工夫がなされていた。さらに、NHKと民放のニュース番組を比較すると、民放のニュース番組の方が形式的な娯楽化、すなわちBGMなどの音響効果や、テロップや字幕などの視覚的な装置を多用してニュースをおもしろくするための工夫が多く見られ、両者には内容面より形式面での違いが大きかった。

3 テレビ番組における形式的娯楽化—字幕・テロップを中心に

テレビニュースの娯楽化に関して80年代と90年代に違いが見られたという、前述した「形式的な側面」というのは、(1) 映像、(2) 字幕・テロップなどの視覚的言語情報、(3) グラフィック・イラストレーション、(4) アナウンス、ナレーションなどの聴覚的言語情報、(5) BGM、の5つに分類することができる。本稿では、その中でも2と3の一部に関連する、字幕、テロップなどの視覚的演出について見ていく。

(1) 字幕・テロップとは

字幕には本来「クローズド・キャプション」と「オープン・キャプション」の2種類がある。クローズド・キャプションとは、テレビの文字

多重放送のシステムで放送され、番組の音声を文字にしたり、効果音を記号にして画面に表示し、テレビ画面に出したり消したりする事が自由にできる字幕放送のことであり、アナログ放送においては必要な人だけに選択的に見られるように、文字放送専用のチューナーを利用して見る。聴覚障害者や、音声の聞き取りにくい高齢者を対象にテレビ番組を理解させるための放送であり、放送法でも各放送局にその放送が義務付けられている。特に事前収録の録画番組については、総務省が1997年に策定したガイドラインに沿って、2007年までにNHKは100%、民放キー局も80~90%の字幕をつける具体的な計画作りを開始したという（木村、2002）。また、今後地上放送がデジタル化されると、すべてのテレビでこの文字放送を映し出すことができるようになる。

一方、現在ニュース番組やバラエティ番組において見られる字幕は「オープン・キャプション」という。こちらは、特別な装置なしに画面に現れる字幕、スーパー、テロップなどを指す。本稿では、主にオープンキャプションについてとりあげていく。

字幕スーパーの「スーパー」というのは、スーパーインポーズ（superimpose）の略であり、画面に、文字や図などを重ねて合成すること、また、映画やテレビの画面に挿入した会話・ナレーションの翻訳・説明の字幕などのことを言う。

また、テロップ（telop）とは、television opaque projector の省略形であり、テレビ放送で字幕などをテレビカメラを通さずに直接送信する装置や、その装置による字幕や絵のことを言う。もともとテロップは、10cm×12.5cmの黒いテロップカード上に表現された白い文字やイメージを固定カメラで撮影し、映像と合成していた。現在ではパソコン端末から電氣的に送出されることが大半になり、マークやキャラクターなどフルカラーの画像を合成することができる。しかし紙製のテロップカードもまだ使われているという（http://www.ntvart.co.jp/03_bus/04_oag/01_what_telop.html参照）。

ここでいうテロップとは、文字情報だけでなく記号や絵なども含めるが、テレビ画面に映される図は、普通フリップ（flip chart）と呼ばれている。もともとテレビ放送などで、図解によって視聴者の理解を助けるために用いた大型のカードのことであるが、パターン（Pattern）とも呼ばれ、27cm×35.5cmの変形B4サイズの用紙上に、イラストやグラフ、地図などを作成しスタジオで直接撮影していた。この大きさは初期の固定カメラで撮影していたころの慣例で、現在ではパソコン出力を多用する関係で用紙サイズはA3を使うことが多くなっているという。また倍フリップと呼ばれる2倍サイズのものからさらに大きなサイズのものをつかうことも多々あり、フリップの大きさは演出効果によって使い分けられている。テロップと同様、パソコン端末から電気信号で送出される部分が増え、電気信号で送出される画像としては、テロップもフリップも大きさは変わらないことになる。

(2) 字幕による番組演出の歴史

現在日本のテレビ番組では、テロップや字幕などによる演出効果が多用化されるようになってきているが、この現状の起源は主にバラエティ番組におけるテロップの進化だといわれることが多い。

坂本（1999）は、現在のバラエティ番組における字幕の過剰なまでの氾濫を議論する中で、その歴史に言及している。画面の上方に出るニュース速報や映像を説明する見出し、場所や人物の名前や制作者や権利関係の表示など以外のテロップは、出演者が口にした言葉をそのまま、あるいは要約して表すことから始まったが、これらの起源と考えられるのは、外国映画の字幕である。そこから派生し、テレビが最初につけた字幕スーパーは、インタビューする相手の声が雑音や状況によって聞き取りにくい、また話し手の方言が強くて聞き取りにくい場合の対策であった。さらに、顔を隠す必要のある証言者のインタビューで音声を変えたために聞き取りにくい場合も字幕が使われた。また、ドッキリ番組などの隠しカメラで撮る映像で、話し手の

顔や口が映らないまま声だけ流れるのは落ち着きが悪いためか、この場合も字幕が使われたという。すなわち、1990年代以前の字幕は、主に話し手の声が聞き取りにくい場合の補助として用いられていた。この使われ方は、バラエティ番組に限らず、ドキュメンタリーやニュースにおいても同様に、現在でも盛んに取り入れられている。

ところが1990年代に入り、必ずしも聞き取りにくいからという理由によらない字幕スーパーが登場し始めた。坂本は、その起源が日本テレビの一連の情報バラエティ番組にあるとしている。たとえば、1990年10月にスタートしたクイズ番組「マジカル! 頭脳パワー!!」は、知識やその答えの正確さではなく、クイズに答える複数のタレントの瞬間的な反応の速さや答えの面白さ、解答者と司会者との掛け合いなどが特徴の番組であり、それぞれの解答者の面白い反応などが聞き取りにくいいため、字幕スーパーにしてそれらの声を強調し始めたという。ところが、ある段階から意識的に面白いせりふや落ちなどを拾いながら字幕化して際立たせ、楽しく個性的な番組を演出する一つの手法として確立していった。その結果、字幕そのものが番組の面白さの一要素となり、他の番組との違いを生み出していったという。

別の例としては、やはり日本テレビで1992年から始まった「進め! 電波少年」(その後「進め! 電波少年」に改題)で、出演者がアポなし取材などをやる際に、会話の場面を画面に映し出せないため、話している会話や状況を説明するための字幕を付け始めたが、その後「と」「と、その時!」「ところが」というような言葉を大きく表示する字幕の使い方が登場した。これらは情報量の少ない映像素材に区切りやメリハリをつけるものであり、出演者が話した言葉の字幕化ではなく、いわばプロデューサーやナレーターの言葉の字幕化である点が、それ以前の字幕とは質的に異なっている。

このような工夫は、作り手側が視聴者である若者たちがゲーム世代の情報の需要の仕方、すなわちスーパーを読むのが早く、「字幕をぱっと読み取り理解していく」という特徴にあわせ

て工夫をした例といえる。1980年代を代表するお笑い(バラエティ)番組であるフジテレビ「ひょうきん族」では字幕は使われなかったが、これはタモリ、たけし、さんまなど特定の「人」が笑いをとっていたからである。ところが、それが飽きられ始めた頃、日本テレビでは人ではなく、「企画」による笑いを取り入れたという。出演者が誰でもよいため、企画するプロデューサーやディレクターが字幕を入れ、番組の企画内容で視聴者をひきつけようとしたのである。その後、バラエティ番組における字幕の演出は、他局の番組ひいてはニュース番組などの他ジャンルにも取り入れられ、日本テレビに限らずテレビ番組全般で見られるようになった。

(3) バラエティ番組における字幕・テロップによる番組演出の現状

主にバラエティ番組において使われてきた字幕・テロップには、どのような類型があるのだろうか。ここでは木村、細井ら(2000)を参考にしながら、多少用語を変えてまとめてみたい。

1) 演出意図による分類

(ア) 発話文字化型(音声をそのまま文字化):

- ① 出演者の会話・言葉: 登場人物の発話をそのまま文字化
- ② ナレーションの言葉: ナレーションの言葉をそのまま文字化
- ③ 音(効果音・自然音): 会話・言葉以外に発せられた音を文字化および記号化

(イ) 説明型(番組内容を文字で理解させる)

- ① 状況: 音声なしで文字だけで状況を説明する
- ② 心理: 心理状態を文字にして説明する
- ③ 時間: 数字を使って時間経過を説明する
- ④ 見出し: 企画のテーマやタイトルを表示する

- (ウ) 画面切り換え型 (『間』を文字で作
出す)
- ① 接続詞：接続詞・接続助詞を使って画面を切り換える
 - ② 伏線：次の展開を予感、期待させて画面を切り換える
 - ③ 画面占領：文字で画面を占領する
- 2) 表現形態による分類
- (ア) ノーマル型
- (イ) 拡大・縮小型：文字の大きさを変化させてメリハリをつける
- (ウ) 漢字一文字型：漢字一文字で映像を強調してインパクトを与える
- (エ) 文字強調型：背景に色をつけて文字を強調する
- (オ) 記号型：「?」「→」「!」などの記号で映像を理解させる
- (カ) 特殊効果型：文字を揺らしたり輝かせたりして特殊効果を加える
- (キ) 写真・絵文字型：会話の文字と並行して写真や絵文字を加える
- (ク) その他

上で行われている分類のうち、1の「演出意図による分類」は、映像をより面白くわかりやすく視聴させるための演出部分に使われるタイプの字幕・テロップである。また、2の「表現形態による分類」は、技術的にテロップの効果を試みるタイプとして分類されている。これらを見ると、かなり多くのタイプに分けられることがわかる。

ところで、このような演出の「遊びや工夫は、どのようにして生まれたのであろうか。坂本(1999)によると、この種の表現は、子供の手紙にある絵文字(たとえば「ごめん」と書いた脇に冷や汗の水滴を書く)にもよく似ているし、また、日本の独特の文化の一つである漫画の吹き出しによる影響も大きいと考えられる。さらに、電子メールや携帯メールで使われる絵文字や顔文字(「ヤッター!!」と書いた後「\ (^o^) /」(バンザイ)と付け加えたり、「ゴメン」と書いた後に「m(_ _)m」(両手をつき平謝り))などにも感覚が近い。

絵文字は本来、文字と異なり言語そのものや言葉の意味といった知識を必要とせず、また使用言語に関わらず、経験により見ただけで理解できるという特徴を持っている(五十嵐・糸井、2004)。テレビは、同じくマス・メディアである新聞に比べて読み書きのリテラシーがなくても、音や映像によって情報を得られるメディアであるため、字の読めない子供から高年齢世代まで幅広い年代や背景を持った視聴者が存在する。一般的に文字情報はリテラシーを必要とするが、絵文字であればリテラシーは必要ないため、情報をすばやく伝えることができる。また、中村(2001)は、携帯電話におけるメールでの絵文字の機能について、(1)感情を豊かに表現する、(2)相手の気持ちを和ませ無用な衝突を避ける、(3)単なる装飾、の3つをあげているが、特にこれらの1,2は、テレビのバラエティ番組での絵文字利用にも応用可能な機能であろう。

(4) バラエティ番組における字幕・テロップの評価

上述の木村ら(2000)は学生と一般人を対象としたテロップに関する意識調査も行っている。その結果、有効回答数183票のうち92%の人が「テロップを意識してバラエティ番組を見ている」と答え、またそのうちの85%が「テロップは必要」、15%が「必要ない」と回答したという。これらの結果からも、現在のバラエティ番組にとってテロップは欠かせない要素となっていることがわかる。なぜテロップが必要かという質問には「おもしろいから」が41%で一番多く、以下「わかりやすいから」(36%)、「テロップがあるのに慣れてしまったから」(14%)となったという。最近の視聴者には、テロップがあると面白い、また逆に、テロップがないと笑えない、という意識が高まっていると考えられる。しかしながら、番組によっては「出演者の言うことをすべてテロップにするのは視聴者をばかにしている」「あまりのテロップの多さに腹が立つ」といった否定的な意見も見られた。またテロップが少ない番組の評価は概して高く、たとえばテロップが少ないと判断

された明石家さんまが出演している番組に対しては、「テロップなしで笑わせることの出来る数少ない番組」といった肯定的な意見があったという。このことは、テロップを使用しなくてもバラエティ番組として成立している点が評価されていることを示しているのではないか。

自由回答の結果では、肯定的な意見としては「目と耳の両方から情報が入ってくることで、インパクトは倍増されるから、あまり考えなくて見られるのでいい」「ないよりもニュアンスが伝わりやすい」、中立的な意見としては「どこも横並びで工夫がないが、字幕放送が増えたと思えばテロップが多いのもよいことだと思う」「テロップが多いと疲れる」「テロップによって日本語が変えられると言ったら大げさかもしれないが、若者視聴者への影響は何らかの形であると思う」「漫画や劇画で育った人たちには違和感がないと思う」、否定的な意見としては「どこが笑うタイミングかわかりやすくしているので押し付けがましい。親切すぎて自分が馬鹿になった気分」「読みづらいテロップが多い。あまり無駄にテロップは出さない方がいいと思う」「芸人の質が落ちる」などがあったという。

(5) バラエティ番組における字幕・テロップの影響

以上で述べられたような、バラエティ番組におけるテロップおよび字幕は視聴者にどのような影響を与えるのだろうか。坂本(1999)は、いち早く字幕を多用した番組が高視聴率をとったことにより、同様のバラエティ番組の制作者がその意味や効果を深く考えずに、どんどん無自覚に字幕スーパーを使い始めたことによって、わずらわしい、異様な番組が生まれ、その結果、テレビ字幕スーパーの氾濫、演出過剰が問題になっていると指摘する。

そこでの問題点は以下の二つに整理されている。一つ目は、字幕を使いすぎることにより、会話の起伏や言葉のあやから面白さを感じ取る視聴者の能力を奪うのではないかという懸念である。上述の調査結果の自由回答に「あまり考えなくてすむ」という意見があったとおり、過

剰なテロップは視聴者の考える能力を奪うことも考えられる。

二つ目として、現在のバラエティ番組の字幕・テロップには文字の誤用がかなり見られるという問題点があるという。現代の子供や若者はテレビやゲーム映像を見る時間が長く、本を読む時間が短い傾向にある。彼らは画面で字を読む機会が多いため、字幕に誤字や間違いがあると、それらを正しいと思い込んで学習してしまうことも考えられる。

4 ニュース番組と字幕・テロップ

(1) ニュース番組における字幕・テロップの使用状況

以上では主に字幕・テロップの歴史と現状を、現在のニュース番組の演出過剰化に影響を与えたと考えられるバラエティ番組の字幕・テロップについて述べてきた。その現状を踏まえた上で、次にニュース番組における字幕・テロップについて論じていく。

上述したように、テレビが最初につけた字幕スーパーは、ニュース番組においても、インタビューする相手の声が雑音や状況によって聞き取りにくい場合、また話し手が外国語や方言を話していて聞き取りにくい場合の字幕であったと思われる。その後、前述したように、バラエティ番組に日本語の発話をわざわざ文字化してテロップで示し、視聴者の注意を制作者の意図した方向に誘導しようとするような手法が目立ってきた。主に1990年代ごろからニュース番組にもこのようなテロップや字幕が増えてきた。

前述の萩原(2001)による、1997年に行われた東京の民放5局とNHKおよびNHK-BS1の夕方および夜のニュース番組の内容分析の結果でも、その状況が見て取れる(表1参照)。ニュース番組の場合は、「項目の見出し」「人名や肩書き、組織名、地名などの名称」を画面上に文字で提示することは慣習化されており、全ニュース項目の80%でこれらのテロップの使用が認められているという。それ以外にも、ニュースの内容を要約して文字情報として提示するような場合は37%、ナレーション代わりに状況の変化などを示すテロップの場合は29%の項目で使

表1 テレビニュース番組における各種テロップ使用率（1997年）*

| | 全体 (分析項目数) | NHKと民放 | | 放送時間帯 | |
|-----------|---------------|-----------|------------|-----------|-----------|
| | | NHK | 民放 | NHK | 夜 |
| 項目見出し | 85% (1762) | 83% (440) | 86% (1242) | 83% (440) | 80% (717) |
| ナレーション代わり | 29% (601) | 44% (231) | 25% (358) | 44% (231) | 24% (214) |
| 地名、人名など | 82% (1708) | 83% (443) | 83% (1196) | 83% (443) | 78% (701) |
| 内容の要約 | 37% (775) | 26% (138) | 43% (624) | 26% (138) | 38% (340) |
| 日本語字幕 | 7% (153) | 6% (30) | 7% (105) | 6% (30) | 9% (80) |
| 発話文字化 | 10% (207) | 0% (2) | 14% (205) | 0% (2) | 9% (76) |

* 萩原（2001）、97ページより抜粋して作成

用され、日本語の発話を文字化したテロップの使用率は10%、外国語の発話の日本語字幕については7%の使用率であった。こうしたテロップの使用率はNHKと民放では違いがあり、ナレーション代わりの字幕についてはNHKの方が多く利用しているのに対して、内容の要約や日本語の発話の文字化のためのテロップは民放の方が多用していたという。特に後者はNHKではほとんど用いられていなかった。番組ごとでは、通常ニュース番組よりも、ワイドショー的色彩の強い番組でこの種のテロップが使われていたという。

以上のように、1997年には、ニュース番組にもかなりの割合でさまざまなテロップが使用されていることがわかる。

(2) ニュース番組における字幕・テロップの評価

川端（2001）は、1998年に東京都で行ったテレビニュースに関する意識調査の結果から、テレビニュース番組の形式面の娯楽化傾向に対する評価をまとめている。調査ではテレビニュース番組でのさまざまな演出（テロップ、BGM、キャスターの個人的意見、街頭インタビュー、キャスター同士のおしゃべり）の量についての評価を、「多い」から「少ない」までの5段階評価で尋ねている。その結果、「多い」または「やや多い」と答えた人の割合は、テロップについては28%、BGMについては23%、街頭インタビューについては29%、キャスターのおしゃべりについては33%であった。これによると、

約3割の人がテロップが多いと感じていることがわかる。また、テロップのみについての評価ではないが、民放のニュース番組について、「娯楽色が強すぎる」に「ややそう思う」「そう思う」と答えた人が49%、約半数いるという結果が出ている。

(3) ニュース番組における字幕・テロップの影響

テレビニュースにおいてはさまざまな情報が提供されるが、その中でもテロップはどのような影響、中でも視聴者の認知に与える影響があるのだろうか。これまでのさまざまな知見によると、映像に付けられたテロップは、その映像の解釈や記憶に影響を与えることが明らかになっている。たとえばリース（Reese,1984）は、テレビニュースにおけるテロップが視聴者の記憶に大きな影響を与えていることを実験で検証し、また中島・太田・井上（1990）はアイカメラを用いた実験により、テロップの提示と同時に被験者の目の焦点がテロップに向かうことを明らかにしたという。つまり、視聴者はテロップが提示されると、そのテロップに注意を奪われるのである。また、中島らは映像に付けられるテロップが映像の「主題情報」と「細部情報」のいずれかにより、視聴者の注意や記憶がどのような変化をするかを検証する実験を行った。その結果、「主題情報」がテロップとして示されるとその映像の主題情報がよりよく注意、記憶され、逆に「細部情報」がテロップとして提示されると映像の細部情報に注意が向かうこと

で、その映像の全体的な理解や記憶が損なわれることがわかった。

また、鈴木ら(1997)は、テロップの効果に関する実験を行い、テロップが視聴者の理解や記憶を高めることを示した。しかしながら、一方でテロップが提示されている背景となる画像情報や音声情報などの理解が損なわれる可能性があることも明らかになった。このように、テロップには、テレビニュース番組における情報提示においてさまざまな認知的影響があることがわかる。情報を中立的に伝えることを原則とするニュースにおいて、さまざまな情報操作が意図的・無意図的に制作者側によって行われる可能性があることは、テロップの氾濫の是非を考える上で重要な点であろう。

5 テレビニュース番組における字幕・テロップの現状—予備的内容分析の結果

現在のテレビニュースでは、実際にどのような字幕・テロップが使われているのだろうか。以上で述べてきたバラエティ番組およびニュース番組における字幕・テロップに関するさまざまな分類をもとに、現在のニュース番組における字幕・テロップの傾向について具体的に見ていきたい。そこで、本研究では現状把握の試みとして、予備的な内容分析を行う。内容分析の対象としたのは、NHKと民放の2005年3月8日、9日、10日の夜のニュース番組である。対象とした番組は「ニュース7 (NHK) (19:00~19:30)」、「ニュース10 (NHK) (22:00~22:55)」、「きょうの出来事 (日本テレビ) (22:54~23:25)」、「筑紫哲也NEWS23 (TBS) (22:54~23:30)」、「ニュースJAPAN (フジテレビ) (23:30~23:55)」、「報道ステーション (テレビ朝日) (21:54~23:10)」の6番組であった。表2には、夜のテレビニュース番組におけるさまざまな字幕・テロップの種類の出現有無を示した。分析に用いた類型は、前述のバラエティ番組とニュース番組における分類を参照し、さらにニュース番組を実際に視聴して、必要だと思われる項目を加えて作成した。項目は以下の通りである。

(1) 演出意図による分類

項目見出し、内容の要約、出演者の発話の文字化、ナレーションの文字化、音(効果音・自然音)の文字化、文字による状況説明、文字による心理状態の説明、数字による時間経過の説明、接続詞・接続助詞による画面の切り換え、次の展開を予感、期待させて画面を切り換え、文字で画面を占領、文字の大きさを変化させてメリハリをつける、漢字一文字で映像を強調、の13項目。

(2) 表現形態による分類

文字のフォントを変えてニュアンスをかえる、文字に色をつけて文字を強調・区別する、背景に色をつけて文字を強調、記号で映像を理解させる、文字に特殊効果を加える、会話の文字と並行して写真や絵文字を加える、の6項目。

表2を見るとわかるように、もともとバラエティ番組で用いられていた字幕・テロップの演出効果の多くが、夜のニュース番組にも多く用いられていることがわかる。今回の分析では頻度は数えていないが、種類だけで見ると、1997年の分析ではあまり演出過剰ではなかったNHKも、民放に引けをとらないぐらいの字幕・テロップの演出が行われているのがわかる。NHKはニュース7、ニュース10の双方とも、特に文字の特殊効果やフォントの変化でニュアンスを変える演出が目立っていた。一方、フジテレビのニュースジャパンは、他の番組に比べて、比較的字幕やテロップの演出が過剰でないように見えた。

以下に具体的な例をあげる。

- ・特殊効果：ミイラ化という文字が左から出てきて移動する(きょうの出来事)
- ・特殊効果：ニュース項目がジグザグと移動しながら出てくる(ニュース7、ニュース10)、
- ・一文字で項目を表す、文字が斜めに出てくる(ニュース7)
- ・発話の文字化でも、韓国スターのファンのコメントを文字化するとき、特に大きな文字で「かっこいい」など、大きさや丸文字で感動を表す(ニュース7)

表2 テレビニュース番組における字幕・テロップによる演出類型の出現有無*

| 字幕・テロップの演出類型 | | 番組名 | | | | | |
|--------------|----------------------|------------------|-------------------|--------------------|-----------------------|-----------------------|-------------------|
| | | NHK ニュース 7 | NHK ニュース 10 | NTV きょうの 出来事 | TBS 筑紫哲也 NEWS23 | フジテレビ ニュース ジャパン | テレビ朝日 報道ステーション |
| 演出意図による分類 | 項目見出し | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 内容の要約 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 出演者の発話の文字化 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | ナレーションの文字化 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 音（効果音・自然音）の文字化 | × | × | × | × | × | × |
| | 文字による状況説明 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 文字による心理状態の説明 | × | × | ○ | × | × | × |
| | 数字による時間経過の説明 | × | × | ○ | × | ○ | ○ |
| | 接続詞・接続助詞による画面の切り換え | × | × | × | × | × | × |
| | 次の展開を予感、期待させて画面を切り換え | × | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 文字で画面を占領 | × | × | × | × | × | × |
| | 文字の大きさを変化させてメリハリをつける | ○ | ○ | × | ○ | × | × |
| | 漢字一文字で映像を強調 | ○ | × | × | × | × | × |
| 表現形態による分類 | 文字のフォントを変えてニュアンスをかえる | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × |
| | 文字に色をつけて文字を強調・区別する | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| | 背景に色をつけて文字を強調 | × | × | ○ | × | × | × |
| | 記号で映像を理解させる | ○ | ○ | × | ○ | × | × |
| | 文字に特殊効果を加える | ○ | ○ | ○ | ○ | × | × |
| | 会話の文字と並行して写真や絵文字を加える | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

*出現有：○、無：×

- ・桜の開花を調べる人に「花の係長」と説明をつける際、桜の花の絵を並べる（ニュース10）
- ・中国、アメリカなどの人名や地名に国旗の絵を並べる（ニュース10）
- ・人の顔の写真とその人の発言を漫画のようにふきだしつきで画面下に示す（報道ステーション）
- ・数字で強調したい部分を大きくしたり小さくしたりして点滅させる（報道ステーション）
- ・文字のフォントを変えて、「性的虐待」というような言葉を恐ろしげに見せる（報道ステーション）

6 考察

以上の結果より、現在のテレビニュース番組では字幕・テロップが氾濫し、その傾向は1997年と比べても大きくなっていることがわかった。また、1997年にはあまりテロップが多用されていなかったNHKにおいても、さまざまなタイプのテロップの演出が使われるようになっていることが明らかになった。

これまでのさまざまな知見からも、テロップや字幕には視聴者の情報の認知を左右する影響があることがわかっている。文字によるある情報のみが必要以上の注意をひきつけることにより、他の部分への注意をそぐ結果になったり、娯楽的な要素を強調することにより、重要な問題から目をそらさせてあまり考えさせないようにする可能性も考えられる。娯楽を目的とするバラエティ番組と異なり、情報を中立的に伝える必要のあるニュース番組において過剰なテロップや字幕による演出を行うことに対して、制作者側はより敏感になるべきではないだろうか。もちろん、内容を分かりやすくするための工夫は必要かもしれないが、それは一歩間違えると情報操作の危険性などにつながり、ニュース報道の基本的なあり方にとって必ずしもよい影響を与えるばかりでないと考えられる。

また、もう一種類の字幕であるクローズド・キャプションとの関わりも重要である。現在のアナログ放送では、ほとんどの視聴者は見る機会がないのが現状であるため、あまり問題とさ

れていないが、最近の字幕・テロップの氾濫は、聴覚障害者などのために番組に付けられているクローズド・キャプションに、少なからず影響を与えている。字幕は画面の下に付けられるのが普通であるが、テロップが多用化され、画面下に表示されると、クローズド・キャプションがオープン・キャプションに重なってしまっただけでなく、文字放送などの字幕制作者側は、番組制作後に字幕をつけるため、オープン・キャプションのテロップに重ならないように、字幕の位置を変更したり、また字幕を省略することもあるという。現在、ニュース番組ではリアルタイム字幕も作られている上、日本のテレビ放送がすべてデジタル化された場合には、すべての視聴者がクローズド・キャプションを見ることが出来るようになる。聴覚障害者、高齢者に役に立つクローズド・キャプションの字幕に対して、ニュース制作者側もより配慮すべきだろう。

また、今回行った内容分析では、予備的な試みとしてテロップ演出の出現の有無のみを分析したが、今後はさらに分析対象とするニュース番組の数を増やして網羅的な研究を行い、またテロップ類型別の使用頻度を分析し、字幕・テロップの現況を明らかにする必要がある。さらにニュースに用いられている他の演出、たとえば映像や音楽の効果などについても、その状況や影響を検討し、今後のテレビニュースのあり方について考えていくべきだと思われる。

7 引用文献

- 萩原滋（1992）「テレビにおけるニュース報道の分析—午後6時台と9時以降の番組比較を中心に」『慶應義塾大学新聞研究所年報』、38,29-52。
- 萩原滋（2001）「ニュース番組の内容と形式—娯楽化傾向の検証と番組の類型化」、萩原滋編著『変容するメディアとニュース報道—テレビニュースの社会心理学—』丸善、pp.67-114。
- 林香里（1999）「タブロイド化」論争とジャーナリズム」、『総合ジャーナリズム研究』、167,52-57。

- 五十嵐紀子・糸井江美 (2004) 「大学生の携帯メール絵文字使用によるメッセージその表現と解釈」『Kyushu Communication Studies』, 2, 1-11.
- 川端美樹 (2001) 「ニュース番組の娯楽化傾向に対する認識と評価」萩原滋編著『変容するメディアとニュース報道—テレビニュースの社会心理学』丸善、pp.201-220.
- 木村紀征 (2002) 「日本の字幕放送の現状と課題」、『デジタル時代の字幕放送～聴覚障害者の情報保障・英米日比較報告～』NHK放送文化研究所メディア経営・調査レポート No.72、50-63.
- 木村珠子・細井章子・鈴木絵里・渡部香・小泉亜矢・川村富美子・大澤由起子・加藤由梨・本田尚子 (2000) 「テレビ画面に踊る文字たちの生態学」『GALAC』、2000年6月号、36-39.
- 上滝徹也 (1989) 「テレビニュースの多様化とその内実」、『放送学研究』、39, 171-183.
- 中島義明・太田祐彦・井上雅勝 (1990) 「動画情報の処理と記憶に対する言語情報の効果」『大阪大学人間科学部紀要』16、65-89.

- 中村功 (2001) 「携帯メールの人間関係」東京大学社会情報研究所 (編) 『日本人の情報行動2000』、pp285-303、東京大学出版会
- Reese, S.D. (1984) Visual-verbal redundancy effects on television news learning. *Journal of Broadcasting*, 28, 79-87.
- 坂本衛 (1999) 「氾濫する字幕番組の功罪」、『GALAC』、1999年4月号、30-35.
- 鈴木裕久・川上善郎・村田光二・福田充 (1997) 「『頑強な』災害警報作成の方策に関する研究 2—テレビ警報におけるテロップの効果に関する実験報告」、『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』、9、1-36.

〔註〕

- (1) 本稿は、JAWS2005年度大会 (THE JAPAN ANTHROPOLOGY WORKSHOP 16th Conference) において発表した“Well-guided or mislead?: Visual Presentation of Tabloidization on TV news programs in Japan”を翻訳し、加筆・修正したものである。